様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：８４６０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０９４４

研究課題名（和文）人骨埋葬資料による縄文社会動態に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the social change of the Jomon period by the burial human bone

研究代表者
岡田　憲一（OKADA, Ken-ichi）

奈良県立橿原考古学研究所・調査課・主任研究員

研究者番号：２０３７２１７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、日本列島西部における縄文時代の埋葬人骨を集成し、それらの年代的位置づけを、考古学的に構築された土器型式による相対編年上に、可能な限り整合させることによって、考古学的事象と形質人類学的異同との対応を図る上での基礎的研究を目指した。その結果、本研究は、埋葬人骨の生前付加属性である抜歯や、死後付加属性である埋葬姿勢について、従来の年代の大別把握より詳細に、土器型式群の動態に即した形での新たな知見を加えることができた。

研究成果の概要（英文）：This study is fundamental researches for correspondence of the phenomena of archaeology and physical anthropology. Therefore this study collected the burial human bone of the Jomon period in western Japan, and let the archaeological relative chronological system by types of pottery match them in detail.
As a result, this study was able to add new knowledge about the tooth ablation and the position of burial human bone of the Jomon period, accorded with a movement of the type groups of pottery in more detail than the usual broad classification grasp.

研究分野：人文学

キーワード：考古学　人類学　先史学　縄文時代　埋葬遺構　人骨

１．研究開始当初の背景

縄文時代とは、日本列島に展開したところの定住的な狩猟採集を主たる生業とした時代である。縄文時代は、更新世の最終氷期にはじまり、完新世の急速な温暖化を迎えたのち、約 2500 年前になって大陸ないし半島系の人々の移住、水稲農耕の伝播よる弥生時代に至るまで、約 1 万年間におよぶ。その間に展開した文化を「縄文文化」、人々を「縄文人」などと概括して呼称することがあるが、これは他の旧石器時代や弥生時代などの括りに対比して用いられる用語であり、少なくとも考古学的には、縄文時代の内でも年代的地域的異同の大きいことが知られ、土器の細別型式を基礎にしながら、様式概念によって集合的把握をおこなったり、遺物、遺構の複合的様相から、後期初頭の「東日本文化複合体」、晩期の「亀ヶ岡文化」などといった把握がなされたりする。さらに、こうした考古学的文化の地域を超えた影響関係については、モノやヒトの移動などが原因と考えられるが、前者については、胎土や産地分析などにより、直接的な移動が究明されているのに対し、後者に関しては、遺物の暗黙知的な製作技術や、保守的といわれる葬送習俗の変化などを把握することにより、間接的に推測している状況である。

本研究の着想は、こうした考古学的な地域的・時期的差異の検討に、形質人類学的な縄文人骨の地域的・時期的異同の検討を加えることにより、直接的かつ具体的にヒトの移動の有無を検証できないかと考えた点にある。

２．研究の目的

本研究の目的は、縄文時代の埋葬遺構ならびに遺物、人骨資料について、考古学的かつ人類学的観点から集成、実査、分析をおこなうことにより、これまで「影響」や「移動」によるものと考古学的に解釈されてきた縄文社会転換期の実態について、人類学的視点を踏まえて究明しようとするものである。

こうした研究を進めるにあたって問題となる点は、埋葬遺構および人骨の年代を決定することである。古くより知られる調査事例では、縄文時代の葬墓制を論ずる上で不可欠な資料であるにもかかわらず、考古学的状況の記載が十分でないため、その年代が不明なものが多い。そのため、そうした事例にもとづく研究成果は、単に「縄文時代」として一括されるか、便宜的に用いられている縄文土器編年の大別時期を記すのみのことが多く、地域、年代によって変異に富む縄文時代の実態把握のために十分な分解能を有していない。

そこで本研究は、こうした資料に関する悉皆調査および集成によって、可能な限り厳密な年代比定をおこない、どの資料がどのような分解能を有しているのかを明らかにすることを企図した。そして、それら年代の判明した資料については、縄文土器編年に沿って時空間上に配列し、各資料の関係を容易に把握できるように配慮した。この基礎的な研究によって、縄文時代の各遺跡の埋葬人骨群は、はじめて考古学的な分析に供しうるものと考える。

３．研究の方法

本研究の対象は、縄文時代の埋葬人骨であるが、地域を日本列島の西部に限定する。ここで言う列島西部とは、福井県、岐阜県、愛知県を東北限とし、長崎県、鹿児島県を西南限とする。

研究方法は、報告書を悉皆調査するとともに、縄文時代の埋葬関連の文献に依拠しながら、列島西部の埋葬遺構を集成した。それとあわせ、報告書の読み込みと、調査図面や出土土器などの実資料の観察から、各埋葬人骨の年代の絞り込みをおこなった。年代は、可能な場合は、土器型式ないしは土器型式群で記載し、それが困難な場合は、縄文土器編年の大別と、それを二分する「前半」と「後半」、ないしは三分する「前葉」、「中葉」、「後葉」で記載した。

４．研究成果

(1)　資料集成概観

本研究の集成による埋葬人骨資料全体を概観すると、地域、年代に偏りが認められる。草創期の資料は現在のところ発見されていない。早期には、明らかに九州と中四国に集中する。これはその出土遺跡の大半が洞穴、岩陰遺跡であることに由来するとみてよく、前期前半までその傾向がある。前期後半になると瀬戸内や近畿などでもまとまった資料が出現する。中期は瀬戸内と東海に、それぞれ中期前半、中期後半の資料があるものの、九州や四国、近畿には多くない。後期になると資料は多くなるが、後期前半に集中する傾向があり、後期後半のまとまった資料は帝釈峡遺跡群に知られる程度である。晩期は一般的に事例の多いことで知られるが、その多くが晩期前半に相当する点は注意すべきである。晩期後半の事例がまとまっているのは、東海のほかにはない。

以下、年代順に各地域の該当資料をみる。

①早期

本研究の集成において、もっとも古く位置づけられるのは、早期中葉のポジティヴな押型文土器を前後する時期である。押型文土器は、早期前半の列島西部に特徴的な土器で、特にその後半期には、ポジティヴな押型文土器として、地域性は弱まる傾向にある。当該期の事例は、四国の愛媛県上黒岩岩陰、穴神洞をはじめ、九州は大分県二日市洞穴、川原田洞穴、枌洞穴、長崎県岩下洞穴、中国山地の広島県帝釈観音堂洞窟などがこれにあたる。いずれも洞穴遺跡で、狭い空間を利用するためか、集骨の形態をとる事例が目立つ。

早期後半の列島西部は、地域性が強くうかがえる。それまでの押型文土器とはまったく

異なって、九州地方は平栫式、塞ノ神式といった土器型式群、中四国地方や近畿地方は、南北で様相を異にし、日本海側では条痕地縄文施文の土器、瀬戸内海側では条痕地文の土器が盛行しており、これらはそれぞれ北陸地方、東海地方と類似する点が多い。当該期の埋葬人骨の事例は多くない。九州の大分県枌洞穴と佐賀県東名遺跡があるほかは、滋賀県石山貝塚程度しかない。滋賀県磯山城遺跡の事例は、層位的には早期後半ないしは早期末前期初頭とされるが、付近から採取した木片を試料とした放射性炭素年代は中期の値を示し、やや留保する必要がある。

②前期

前期前葉は、早期後葉の土器型式の地域性を背景にしながらも、広域にわたって類似の特徴を採用しつつ、土器型式群が再編される。九州は条痕地に隆線文を発達させる轟 B 式、中四国は条痕地に刺突文を施すものが席巻し、山陰の長山馬籠式、西川津式、瀬戸内の羽島下層Ⅰ式や近畿の一乗寺南地点下層式や粟津 SZ 群、それに縄文施文を依然として多用する北近畿の志高式などがある。ちなみに、轟B式や西川津式は、韓半島南部でも確認され、当地の隆起文土器は、同時期の東海以東の土器と比べればよっぽど類似点が多い。当該期の事例は、九州にはままある。熊本県轟貝塚、曽畑貝塚、長崎県下本山岩陰、大分県横尾貝塚の例がそれである。大分県枌洞穴や広島県の帝釈穴神岩陰の事例も当該期と指摘されるが、厳密に前期前葉におさまるものか定かでない。近畿、東海では当該期の事例はなく、中国地方も極めて少ない。清野謙次らによって 60 体以上の人骨が発掘された広島県大田貝塚は、一般的に中期とされるが、少なくとも 1964 年の広島県調査時出土の１例は、羽島下層Ⅱ式の時期と考えられるので、少なくとも一部は前期前葉にかかる可能性がある。なお、長崎県越高遺跡の事例は、隆起線文土器とともに出土しており、近年、韓半島南部で当該期の埋葬人骨出土例が多くあることから、比較研究の上で重要な位置を占める。

前期中葉は、九州では曽畑式が席巻する。砲弾形の器形で、沈線文を多用する点は、韓半島との類似点と見なされることが多いが、土器型式としては独自のものとして明らかに切り離すべきものである。一方、中四国地方では羽島下層Ⅱ式以降、爪形文施文が盛行、後、列島東部の影響下、条痕にかわって縄文が多用されるようになる。磯の森式、北白川下層Ⅱ式などがそれである。この時期に限定して考えることのできる事例は、九州は長崎県岩下洞穴や佐賀県菜畑遺跡であろうか。長崎県脇岬遺跡にも該当例がある。瀬戸内の磯の森式の標式遺跡である岡山県磯の森貝塚でも、当該期の貝層から不完全ながらも人骨の出土例があるが、それ以外には見当たらない。著名な大阪府国府遺跡は、前期、晩期、それに弥生時代中期の事例があるとして、池田次郎によって慎重に分離された。特に土器を頭上に被せる甕被葬はこの時期独特であり、その土器型式によってその時期比定は確実になる。北白川下層Ⅱb 式や同Ⅱc 式などが認められる。なお、近年、報告された富山県小竹貝塚も、概ねこの時期に併行するとみてよかろう。

前期後葉は、月崎下層式や彦崎 ZⅠ式、北白川下層Ⅱc･Ⅲ式などの地域性が一度明瞭になった後、中期初頭に向かって似通った土器型式へと再編される時期である。福岡県新延貝塚や大分県大恩寺稲荷岩陰などはこの時期の可能性があろう。瀬戸内には岡山県原貝塚、船倉貝塚、彦崎貝塚などあり、後二者には彦崎 ZⅡ式の時期にほぼ限定して考えられる事例がある。岡山県羽島貝塚や船元貝塚も、それぞれ前期、中期の標式遺跡であるが、埋葬人骨の時期はこのあたりとなる可能性がある。

③中期

中期前葉は、船元Ⅰ･Ⅱ式が、九州から近畿まで広域に認められるが、中葉には各地域で似た要素をもつものの、地域化が著しく進む。当該期の事例は多くなく、岡山県西岡貝塚や大橋貝塚が中期前葉の例として知られるほか、彦崎貝塚、涼松貝塚にも同期と考えられる例がある。大分県横尾貝塚も当該期の好例であるが、九州にはこれ以外の確実な事例がない。中期前半は総じて確実な例が少ないので、仮に広島県大田貝塚の主要な部分が中期になるとすれば貴重である。なお、近畿には中期前葉の滋賀県粟津湖底貝塚の遊離骨しか確実な事例がない。兵庫県辻井遺跡の埋葬人骨は、従来、中期とされてきたが、近年の調査成果から判断すれば、晩期前半に位置づけるのが妥当である。

中期後葉は、各地で前段階からの系統性が途絶え、地域性が目立つ傾向がある。九州では並木式、阿高式が成立、西部を主たる分布域として、後期前葉まで「阿高系」と呼ばれるこの系統が続く。瀬戸内では船元式から連続的な変遷を追えた里木Ⅲ式の後、明らかに近畿などと関連する矢部奥田式に転換する。その近畿の中期後葉は、北白川Ｃ式が相当するが、未だ先行する里木Ⅱ･Ⅲ式との隔絶は大きく、その出現経緯は鮮明になっていない。ただ、東海は資料が充実しており、列島西部の系統から東部の系統へと置換する様子が明瞭に看取できる。こうした一連の動きは、土器だけに限らず、その他の遺構、遺物も含めて看取され、列島東部からの強い影響（ヒトの移動）によって引き起こされたものと考えられている。なお、その後、後期初頭は、中津式に代表される磨消縄文を特徴とする土器群が展開するが、ここに至って、各地域性は再び近似性を強めることになる。

④後期

こうした動きが認められる時期の埋葬人骨は、それまでに比べれば事例が多い。中期末から後期初頭の阿高式ないし坂の下式の

頃、鹿児島県出水貝塚、熊本県尾田貝塚、長崎県宮下貝塚、佐賀県宮ノ前北貝塚に該当例がある。鹿児島県市来貝塚、熊本県七ツ江カキワラ貝塚、福岡県桑原飛櫛貝塚、山鹿貝塚の例は、後期前葉とみてよいが、前二者と後二者では明らかに土器様相を異にしており、後者は中四国地方と近縁である。九州以外では岡山県里木貝塚に中期後葉から後期初頭の可能性のある例が知られ、同県中津貝塚、阿津走出遺跡も後期前葉となる可能性がある。ただし、遺跡全体の出土土器には晩期のものまで含まれ、当該期に限定できるか定かでない。人骨に抜歯のあることから、晩期に比定する考えもある。四国の高知県宿毛貝塚や愛媛県平城貝塚は、後期前葉の事例とみて間違いなかろう。宿毛貝塚は宿毛式、平城貝塚は平城Ⅰ・Ⅱ式の頃とすれば、後者は後期前葉でも新しく位置づけられる。近畿では滋賀県正楽寺遺跡に北白川上層式期の該当例がある。大阪府池田寺遺跡では、直径 1m 程ある平面円形の土坑から、後期初頭の土器と焼獣骨とともに、被熱した人骨片の出土例があり、少なくとも列島西部では、加熱処理された人骨のもっとも古い事例になる。後期前葉、縁帯文土器成立期の例として滋賀県林・石田遺跡に後期前葉の焼人骨が知られる。東海の愛知県村上遺跡は、九州以外で中期後葉に特定できそうな稀少な例である。咲畑貝塚は層位的にこれに続く時期の例となるが、遺存状況はよくない。これに対して愛知県林ノ峰遺跡の例は、後期初頭から後期前葉の標式的な資料である。愛知県芋川遺跡例は、集落と同じ中期とされることもあるが、中期末の竪穴建物廃絶後に掘り込みがあり、土坑内に後期前葉の土器を含むことから、それよりは確実に新しい。遺跡全体の出土土器からすると後期前葉の範疇に収めて理解したいところだが、晩期末の土器埋設遺構があることと、この人骨に抜歯があることから、晩期に下げる考えもある。後期前葉の東海でもっとも充実した資料は、愛知県川地遺跡の清野謙次資料であろう。清野以降の調査では、後期後葉までの土器が出土しているが、その分布状況を検討した結果、人骨検出地区は後期前葉が主体であると判断できる。なお、列島東部でも西寄りの長野県北村遺跡の埋葬人骨は、これに概ね併行する時期の比較対象となろう。

後期中葉は、後期前葉からの系譜をひく西部九州の北久根山式、東部九州の鐘崎式、四国西南部の片粕式、近畿の北白川上層式 3 期、東海の八王子式など、各地で地域性を強め、その後、それとは異なる平行線磨消縄文を導入する再編期にあたる。資料はどの地域をとっても少ない。九州では佐賀県宮下貝塚、志多留貝塚などが該当する。熊本県浜の洲貝塚、大分県ボウガキ貝塚も後期前葉から中葉にかけての例となろう。中四国では例がなく、近畿では佃遺跡の遊離骨が唯一の事例となる。なお、島根県平田遺跡の土坑内から出土した人骨片はこの時期にあたり、福岡県浄土院遺跡の太郎迫式の深鉢に納められた焼人骨も当該期の重要な事例となる。

後期後葉、列島西部は平行線磨消縄文土器から縄文が脱落し、平行凹線文を主たる文様とする土器群になることによって、広域に近似性が高まる。九州では熊本県松橋大橋貝塚、御領貝塚がこの時期とされるが、鹿児島県柊原貝塚がもっとも確実な事例である。中四国では、広島県帝釈観音堂洞窟が当該期、豊松堂面洞窟と帝釈寄倉岩陰が後期後半の事例であり、特に帝釈寄倉岩陰は約 40 体からなる集骨としてまとまった資料である。近畿、東海は確実な例が稀少で、大阪府馬場川遺跡にその可能性ある事例があるほか、愛知県吉胡貝塚の貝層下の埋葬人骨は当該期にまで遡る。特筆すべきこととして、当該期には焼人骨が比較的多い。古くより知られる事例に、奈良県宮滝遺跡があるが、京都府伊賀寺遺跡、大阪府向出遺跡ともに土坑内より、加熱処理された複数個体の人骨が検出されている。

⑤晩期

後期後葉の凹線文土器による広域近似性は、後期末には地域ごとに変容して地域性を強め、晩期初頭、西部瀬戸内の岩田第四類土器の影響によって再編される。そして、晩期前葉から中葉にかけては、再び広域に土器型式の近似性が高くなる。九州の黒川式、近畿の篠原式、東海の桜井式や稲荷山式が該当する。瀬戸内の谷尻式は、晩期中葉でも新しい段階の地域化を進めた型式である。なお、当該期には、それまで九州で盛行していた土器埋設遺構が、近畿、東海などでも急増することから、岩田第四類土器の影響とともに、西から東への拡散を指摘する説もある。

晩期前半の埋葬人骨の事例は九州を除けば比較的多い。九州では長崎県深堀貝塚が該当する程度であり、晩期中葉であれば、鹿児島県黒川洞穴、上焼田遺跡、熊本県天岩戸岩陰などがある。中国では広島県帝釈猿神岩陰の集骨例が該当する。学史上著名な岡山県津雲貝塚は、年代を明示する根拠がないが、貝層出土の土器から判断すれば、後期後葉から晩期中葉が主体であると考えられる。近畿は兵庫県日笠山貝塚、辻井遺跡、大阪府国府遺跡、日下貝塚、馬場川遺跡など、晩期前半の事例は多い。また、滋賀県滋賀里遺跡は晩期前葉から晩期後葉まで連綿と資料があり、奈良県観音寺本馬遺跡は晩期中葉に限定できる事例である。東海は愛知県雷貝塚、玉ノ井貝塚、東畑貝塚、宮西貝塚、西の宮貝塚、宮東第 1 号貝塚、本刈谷貝塚など、いずれも元刈谷式期を中心とした晩期前半である。枯木宮貝塚は晩期前葉、堀内貝塚は晩期中葉に限定できる事例であろう。当該期は盤状集骨が多いことでも知られる。

晩期後葉は、列島西部全域に凸帯文土器が展開する。特にそれを 3 期区分したうちの 2 期には、土器の器種構成に変化が現れたり、広域にイネ圧痕が認められるようになり、農耕に関する情報が広く伝わったことをうか

がわせる。当該期に限られるわけではないが、やや幅広く晩期後半に相当する埋葬人骨の事例として、九州は鹿児島県一陣長崎鼻貝塚、長崎県脇岬貝塚、白浜貝塚がある。晩期後葉に限定すれば、佐賀県菜畑遺跡、福岡県新町遺跡があり、うち新町遺跡は、韓半島に由来する支石墓の形態を採用している。四国では愛媛県江口貝塚が好例である。中国は資料が少なく、島根県小浜洞穴の遊離骨が当該期になる可能性があるほか、岡山県南溝手遺跡で歯のみの出土例がある。近畿は和歌山県鳴神貝塚が当該期となり、瀬戸遺跡は晩期後葉から弥生時代前期にかけての事例となる。東海は愛知県五貫森貝塚、岐阜県羽沢貝塚のほか、愛知県伊川津貝塚 1992 年調査区に好例がある。愛知県樫王遺跡は弥生時代前期、著名な平井稲荷山貝塚や吉胡貝塚の一部の事例もこの時期まで下ってこよう。なお、晩期後葉には、大阪府鬼塚遺跡、馬場川遺跡、滋賀県土田遺跡、愛知県馬見塚遺跡など、後期後葉同様、焼人骨の出土例が目立つ。

(2)　本集成によって新たに得られた知見

本研究では、列島西部における縄文時代の埋葬人骨を集成し、その年代的位置づけの絞り込みを可能な限りおこなうことによって、時空間上における埋葬人骨の位置を措定し、あたかも編年表のように図示することを試みた。この作業によって、縄文時代各遺跡の埋葬人骨群のもつ分解能とそれらの年代的併行関係とが明らかになった。以下、この作業の結果、新たに明らかになったことをまとめる。

①抜歯型式の年代的変遷

列島西部においてもっとも古い抜歯は、早期中葉まで遡る可能性はあるが確実ではない。愛媛県上黒岩岩陰で下顎左右中切歯に抜歯の疑いがあり、熊本県轟貝塚、岡山県彦崎貝塚に同位置の抜歯があることから、少なくとも前期後葉には、「2I1 型」ともいうべき抜歯型式が確立していた可能性がある。また、岡山県涼松貝塚、里木貝塚の例から、この抜歯型式が中期後葉から後期前葉まで引き続き定立していた可能性が考えられる。なお、前期後葉には上顎片側切歯のみの抜去例などあり、その他の抜歯型式が存在した可能性も考えられる。

春成（1973）の設定した左右対称の抜歯型式では、上顎左右犬歯抜去の「0 型」抜歯が後期初頭に認められ、以降、晩期まで継続する。下顎左右犬歯抜去の「2C 型」抜歯は、後期後葉には確実に出現し、晩期に継続する。その系譜を「0 型」抜歯に求められると仮定するならば、後期中葉頃に確立した可能性がある。下顎左右中･側切歯抜去の「4I 型」抜歯は、晩期前葉には確実に存在し、後期後葉には定着していた可能性あるが定かでない。その系譜を「2I1 型」に求められると仮定すると、後期中葉頃には確立していた可能性がある。

②縄文時代後期前葉および晩期後葉の伸展葬の盛行

列島西部、特に西部瀬戸内から東北部九州にかけて、後期前葉における伸展葬の盛行が認められる。近畿や東海では不明確であるが、愛知県林ノ峰貝塚の事例からして、後期初頭には伸展葬が一定量あった可能性が高い。これが確実視できないのは、当該期資料の少ないことに起因する。

列島東部、特に関東地方では、中期に屈葬とともに伸展葬がみられ、後期前葉には伸展葬が屈葬を凌駕する。列島西部では、中期末から後期初頭にかけて、遺物や居住施設などに、列島東部からの強い影響が認められるが、後期前葉の列島西部に伸展葬が盛行することもこの一環として理解できる可能性がある。

列島西部の西部瀬戸内地方と東海地方では、晩期後葉に伸展葬の盛行が認められる。列島西部でも九州にはその傾向が認められず、近畿も屈曲が緩くなる傾向があるものの、伸展葬の盛行とまではいかない。西部瀬戸内における伸展葬のあり方や系譜は、現状では不明の部分が多い。東海における伸展葬の系譜は、浮線網状文土器や「壺棺再葬墓」の波及を背景として、中部地方に求められる可能性がある。少なくとも晩期後葉から弥生時代前期まで引き続いて行われる。

③標準資料として用いられる埋葬人骨の年代的位置づけ

縄文時代人骨の形質人類学的研究において、しばしば標準的な資料として扱われてきた資料の年代的位置について知見が得られた。

広島県大田貝塚の埋葬人骨は、中期ないしは前･中期とされてきたが、伸展葬が多いことから、その大半が後期前葉となる可能性がある。また、これまでの層位的所見から、前期前葉の屈葬例があると考えられるので、本資料は年代的に大きな幅があって一括できず、埋葬姿勢ごとの形態分析や、放射性炭素年代測定等による検証が求められる。

岡山県津雲貝塚の埋葬人骨は、左右対称の「4I 型」、「2C 型」抜歯の施行率が高いこと、屈葬が主体を占めることから、後期後葉から晩期中葉までの範疇に収まると考えられる。貝層出土土器や埋設土器の型式もそれを傍証する。

愛知県（亀山）川地遺跡の埋葬人骨は、従来どおり後期前葉にほぼ限定できる資料と考えられる。

愛知県平井稲荷山貝塚の埋葬人骨は、晩期中葉の単純資料と考えられることがあったが、同地点出土遺物からみて、後期後葉から弥生時代中期までの広い範疇で理解され、出土土器型式の比率と埋設土器の型式から判断して、晩期中葉および晩期後葉から弥生時代前期の埋葬が重複していると考えられる。伸展葬のものは、晩期後葉から弥生時代前期に位置づけられる可能性が高く、埋葬姿勢ご

との形態分析や、放射性炭素年代測定による検証が求められる。

愛知県吉胡貝塚の埋葬人骨は、大きな年代幅をもっており、後期末から弥生時代前期までの資料が複合している。この間ほぼ連続して埋葬が行われていると考えられるが、この空間を利用した埋葬者および被葬者が、長期にわたってひとつの系譜下にある集団とは限らない。埋葬姿勢からは晩期後葉を境に 2 つに区分することが可能なので、この遺跡の埋葬人骨群を一括して評価する前に、そうした埋葬姿勢ごとの形態分析や、放射性炭素年代測定による検証が求められる。

④焼人骨葬の出現と展開

列島西部における焼人骨葬の出現は、所謂「埋甕」とされる土器埋設遺構とともに、後期初頭に求められ、それ以降、土器埋設遺構と組み合わされて、再葬の一形態として継続する。その系譜は、伸展葬同様、列島東部に求められる。土器埋設遺構は、後期前葉に列島西部に波及し、後期中葉から晩期前葉にかけて西部九州で盛行、そこで成立した「九州型埋甕」とともに、晩期前葉から中葉にかけて近畿、東海に再び波及し、晩期後葉まで盛行する。

その間の後期中葉から後葉における近畿地方では、土器埋設遺構はほぼ皆無で、代わりに土坑内の焼人骨出土例が知られる。東海地方も当該期の土器埋設遺構は少ないが、三重県天白遺跡などに群集してある。それは配石遺構などとともにあり、出土土器にも列島東部の影響を認めることができることから、列島西部の動向とは別に、中部地方に系譜が求められると考える。また、晩期後葉から弥生時代前期にかけての土器埋設遺構の盛行も、中部地方との関係を考える必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①岡田　憲一、「近畿地方における縄文時代後晩期の葬墓制―向出、観音寺本馬遺跡から―」、『季刊考古学』第 130 号、査読なし、雄山閣、2014 年、39～41pp.

②大藪　由美子、「近畿地方における縄文人骨の形質人類学的研究」、『研究紀要』第 17 集、査読なし、由良大和古代文化研究協会、2012 年

〔図書〕（計２件）

①岡田　憲一、「近畿地方における縄文時代後晩期の葬墓制―向出、観音寺本馬遺跡から―」、『季刊考古学』第 130 号、査読なし、雄山閣、2014 年、39～41pp.

②大藪　由美子、「近畿地方における縄文人骨の形質人類学的研究」、『研究紀要』第 17 集、査読なし、由良大和古代文化研究協会、2012 年

６．研究組織

(1)研究代表者

岡田　憲一　（OKADA, Ken-ichi）
奈良県立橿原考古学研究所
調査課　主任研究員
研究者番号：　20372170

(2)研究分担者（平成 23･24 年度）

大藪　由美子　（OYABU, Yumiko）
奈良県立橿原考古学研究所
企画課　研究員
研究者番号：　20566955